

インプラント補綴特有のメンテナンス

岡村 光信 (福岡県福岡市開業)

患者も施術者も期待するインプラント補綴の長期的な安定した予後とは(1)当然ながらインプラントフィクスチャーの長期的な安定、Ranert(1995)らがいう生体力学的平衡を保ち骨結合を失わないこと、つぎに(2)上部構造補綴物がこわれにくいことであろう。この“こわれにくいこと”ではインプラント補綴物特有の意味が天然歯補綴物におけるそれに加えいくつかある。まず天然歯列補綴物と同様なものとしては、(1)セラミック材料など破折のないこと(2)咬合面材料においては磨耗が少なくかつ対合歯へ与える磨耗も少ないことなどがあげられる。この他インプラント補綴特有なものとしては(3)補綴物スクリュー、アバットメントスクリューが緩まない、また破折しないこと(4)もしスクリューが緩んだり、破折したときそのリカバリーが容易であることである。以上インプラント補綴における様々な予想される合併症、また治療にさいして術者は患者とともに認識しておく必要がある。そしてインプラント補綴が長期的安定をうるならば天然歯における補綴物に比較し、再修復の大きな原因の一つである2次カリエスもなく、また補綴物がスクリュー固定式であれば容易に修理も可能であり、“リトリバブル(retrievable)再治療可能”又は“リペアブル(reparable)再修理可能”なものとして考えられるかもしれない。

本講演では、(1)清掃性と自浄性(インプラントフィクスチャー間距離の観点から)(2)補綴物修理とリカバリーの容易さ(セメント固定式かスクリュー固定式かという観点から)(3)こわれにくい上部構造のデザインおよび素材の選択 (a.インプラント上部構造材料の研究、b.コンポーネント、アバットメント材料の研究、c.コンポーネントとしてのフレーム、d.臼歯部咬合面材料の選択)など過去の経験もふまえながらインプラント補綴特有のメンテナンスについて論じてみたい。